

栄光

説教・「収穫は多いが働き手が少ない」	内村伸之宣教師……1
特集・岸先生、長い間ありがとうございました……	2
追悼・加瀬和子姉……	8
受洗おめでとう 澤田洋一兄……	8
説教・「気長に」岸俊彦牧師……	9
ルデヤ会講演会要旨……	10
講演会報告……	11
長老のファイル……	11
牧師の書斎から……	12

説教 『収穫は多いが、働き手が少ない』 マタイによる福音書 9 章 35 節～38 節

ミラノ賛美教会宣教師 内村伸之

現在、ヨーロッパの日本語キリスト教会は深刻な危機に直面しています。牧師が次々と離れていき、信仰を必要とする多くの人々に対して十分な働き手がいません。フランスには約 4 万人、日本全体では 20 万人の日本人が暮らしており、彼らの魂は神を求めています。しかし、日本語教会はパリやスイスに一つずつしかなく、牧師も次々に辞任を決めています。

ヤンの状況にも当てはまります。イエス・キリストは地上での活動を通して、人々に福音を伝え、弟子たちを育てました。そして、ご自身の働きを継承するために 12 弟子を選び、宣教の使命を委ねました。イエスは群衆を見て深く憐れまれ、「羊飼いのいない羊の群れ」として彼らの苦しみを理解し、助けようとされました。同じように、今の日本人社会も迷い、傷つき、疲れ果てた人々であふれています。

この状況の中で、私には神から示されたビジョンがあります。それは「今こそ福音を必要としている人々が多い」ということです。しかし、伝える働き手が少ないのです。聖書には「収穫は多いが、働き手が少ない」と記されています。これは現代の日本人クリスチ

私たちの神は単に苦しみを知らただけでなく、助けてくださる神です。そして、私たち自身が神の愛を受け、迷える羊を探し、導く使命を持っています。イエスが弟子たちに「収穫の主に働き手を送っ

てくださるように祈りなさい」と命じたように、私たちも祈り、働き手を育てなければなりません。宣教の働きには三つの段階があります。第一に、イエスの教えを学ぶこと。第二に、イエスと共に働き実践すること。そして第三に、聖霊の導きのもとで自ら福音を広めることです。私たちは今、第三の段階にあります。イエスはご自身の使命を教会に託され、私たちに「やってみさせる」ことを決めておられました。

収穫の時です。神は、民族や文化の壁を超える愛を私たちの教会に与えてくださいました。それは本来人間にはできないことです。神の愛によって可能になりました。迷える羊が救われる時、天国では最大の喜びが起こります。そして私の心も、イエス・キリストを信じる人が起こされる時、最も喜びに満ちます。

今、私たちは改めて祈りましょう。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださいように祈りなさい」とイエスは命じられました。祈りこそが宣教の原動力です。私

自身、祈りが足りなかったことを悔い改めます。そして、これからは皆さんとともに、もつと熱心に祈りたいと願っています。

収穫の働きは牧師や伝道師だけのものではありません。私たち一人ひとりが働き手となるのです。まず、自分がクリスチャンであることを周囲に伝え、人々の話を傾け、祈ることから始めましょう。イエス様は今日も働いておられ、迷える羊を探しておられます。私たちもイエスの心を持ち、共に働き、刈り取る者となりましょう。

神様、あなたの御心を私たちに示し、宣教の情熱を新たに燃え立たせてください。私たちが働き手を育て、派遣する教会となることができまうように。感謝して、イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。



ウクライナにて
左から内村宣教師、ヴァレンティン
牧師、船越宣教師

岸先生、長い間 ありがとうございました



42 年間の岸先生のお働きに感謝して、
様々な場面で岸先生と深く関わってきた
皆さまからメッセージをいただきました。



岸 俊彦 牧師 略歴

1954 年 東京都生まれ
1973 年 三鷹市相愛教会にて受洗
1979 年 早稲田大学法学部卒業後、東京神学大学に編入学
1983 年 同大学大学院修了後、経堂北教会の伝道師に就任
1986 年 按手を受け正教師に
2002 年 主任牧師に就任

懐かしい船橋集会

桜岡民枝

船橋集会!! 何と懐かしいことだろう。

少し広めのリビングができた時、まっ先に家庭集会がしたいと牧師に申し出た。すぐに実現。3人の牧師に引き継がれ、長年、続けることができた。

沢山の方々が集ってくれた。

想い出すことは山程。多くの方々を天国に送った。お一人おひとりが、懐かしい。

教会生活から遠ざかっていた友人が、船橋集会をきっかけに教会生活に戻られ、今は御家族共々、教会員に。また、集会に長年参加し、受洗に至った友人もいる。

私は特に誘いすることもなく、あれ?と感ずる教会員も集ってくれた。出席者がそれぞれ他の方々にお声をかけてくださっていた。岸先生は大きな車に奥様と共に御近所の年配者を何人もお乗せくださり、本当に感謝であった。

船橋集会の特長のひとつは、必ず昼食を出したことだ。

岸先生のゆっくりした学びの後お食事を御一緒するのは本当に楽しい時間で、話に花が咲いた。

当時、「友の会」に入っていた私は食事作りが楽しかった。大鍋に鶏一羽じっくり煮込み、その上に、大きく切った多量の野菜、大根、人参、じゃがいも、玉ねぎ、こんにゃく、ゆで卵等をのせ、じっくり煮込む。大皿、3、4皿分くらいはすぐにできる。これとグラタン、サラダ、手作りパンと並ぶ。ある時は、魚のカマの煮つけを沢山。骨のまわりの魚をおいしい、おいしい、とすするように召し上がっていた友の想い出。懐かしい!! 今は天国に移られた。途中、私一人だいたいへんだらう、と岡田直子、映子姉が隔月に会場を提供してくださった。

岸先生のおかげで、やわらかいムードの船橋集会を長年続けられ幸せな時間を重ねることができた。

岸と夫妻のお働きに感謝して

岩井直子

20年ほど前、愛犬の散歩が日課で教会の前を何度も通る私に、恭子さんから「ワンちゃんと一緒に良いので週日に事務の手伝いを」とお話をいただき、週2〜3回事務室でパソコンに向かうようになりました。週報の準備が主で、岸先生はもともと様々な用事を考えていらしたのでしたが、私の能力の限界を考慮していただきました。

愛犬「スター」との生活は2012年まででしたが、事務室も教会もテリトリイと思っていたスターは小型犬ながら、教会に入ってこられる岸先生に吠えかかり、先生は扉にしがみついています。恭子さんからは、一口大に切った大好きなリンゴをいただけるので友好な関係を築いていました。

恭子さんはいつも、教会員が気持ちよく礼拝を守るように、きめ細かいお心配りをしてくださいました。集会のテーブルの配置や、

出入り業者への対応、会堂清掃の準備、備品の補充、また主日の朝は冷暖房を早くからセットしてくださいました。祝会や伝道師の先生方の歓送迎会などは私も一緒に献立を作成しました。竹を割ったような性格で、決断が早く、的確な指示を下せる、まさに縁の下の力持ちです。また伝道師の先生方にとっては母親のような存在でもあったと思います。岸先生が礼拝を欠席することがなかったのも、最善の健康状態でいられるように恭子さんがご準備なさったからです。夏の休暇も、有事の際にすぐ教会に戻れるように、車で3〜4時間の所までしかお出かけにならないなど、いつも教会のために、神様の御旨に適った教会生活をなさってくださいました。

私の日常に恭子さんとお交わりがあり、昨秋つくばへ転居されてからも教会で言葉を交わせたことは嬉しかったです。つくばと経堂は離れています。つくばと経堂を見上げて歩みを強められたらと祈っております。でも、たまには経堂にいらしてくださいね。肩に荷物を持たずに、のんびりと。

岸先生とCSミュージカル

内藤慎也

僕の経堂北教会のスタートは1983年4月。2浪した僕は、現役合格した2つ下の妹（綱川めぐみ）と同時に金沢から上京し、経堂北教会へ転会した。そして同じ1983年4月、岸先生も経堂北教会に赴任された。つまり、少しおこがましいが、岸先生とは「経堂北教会同期」であるという意識がずつとあった。なので（教会生活の密度は全然違うけれど！）経堂北教会で全く同じ期間を過ごした岸先生が退任されるというのは、感慨深い気持ちである。

さて、上京当時から僕は音楽でプロを志向していた。それを知る岸先生から誘われ「ホワイトクリスマス」を高校生・青年のコーラス&バンドで、イヴ礼拝後に披露したことがあった。そしてそれをきっかけに1985年のクリスマス、CSのミュージカルが始まった。記憶は曖昧だが「おい慎也、

クリスマスにアルタバンのミュージカルをやる。脚本は俺が書く。なので、音楽の方、よろしく！」的な会話が合ったか。その年はCS各科ごとに演目を分けたが、翌年からCS全体でやるようになり「モーセ」をやった。これがその後のフォーマットとなった。

当時は、照明設備も手作りしてしまうほど、かなり大掛かりなことをやっていた。若いCS教師たちがそれぞれの役割を担い、教会に居残って準備を夜遅くまで……。まあ、それも凄く楽しかったわけで、青春である。岸先生もまだ若かったのだ、同じノリで盛り上がっていた（と思う）。

今思えば、岸先生とともに始めたCSミュージカルは、経堂北教会におけるひとつのエポックメイキングだったかも、と。そして信仰の弱い自分にとって、おかげで今でもなんとか教会に繋げてもらっている大事なものである。経堂北教会に来て40数年、いろいろな思い出や経験を積み重ねられ、それを導いてくださった岸先生には感謝しかない。岸先生、ありがとうございました。

40年の思い出

志磨恭子

この40年を振り返るとつい昨日のことにように思われます。同じ年齢の伝道師の先生、その前までは年上の先生方でしたから、新鮮でした。年齢もですし、結婚した時期も重なり、同世代の教会員との交わりは、青年会ともCS教師会とも違い、家庭的な話題が多かったです。まだ若かったから、いろいろな活動と学びの時を持ちました。一緒に箱根に出かけたことも思い出です。また、上の代から引き継いでバザーのキーを教会でも焼いて、たくさん売り上げがありました。その頃のノアの会は小さな子どもたちもいたので、礼拝後、昼食を一緒にして学びの時を持っていました。

父が亡くなった時にも色々とお世話になりました。父は洗礼は受けていませんでしたし、礼拝にも出席したことはなかったのですけれど、母も私も妹も受洗してクリスチャンになっていたことは否定することもなく、「自分の葬儀は教会で」と言っていました。ちょうど私は不在でしたので、葬儀を少し延ばしていただきました。時間があつたので、先生は父の書いた回顧録を読んでくださり、葬儀の説教でそのことに触れ、会社関係や親せきなど、教会の葬儀に慣れない出席者にもわかりやすく話してくださいました。あとで、「キリスト教の葬儀もいいなあ」と会社の方がもらっていました。先生もよく「葬儀や結婚式は伝道のチャンスだ」とおっしゃいますが、本当にそうだなあと思いました。

CSに小学校3年生の秋から入っていただき、60年以上経ちました。そのうちの40年を岸家の皆さまと毎週お会いし、良い時をいただいたと思います。ありがとうございました。

「牧師は日曜日しか働かなくていいから楽でいいよねー」「そうだよ。こんなに楽な仕事は他にないよ。最高だぜ」

42年前、岸先生とよくこんな会話をしていました。

岸先生が伝道師として赴任されたとき、私は高校1年生でした。初穂会の同期メンバーは他にもいましたが（そのうちの一人は太友太郎さん）、岸先生と向かい合つての「サシの分級」のことがよくありました。聖書の講解はもちろんありましたが、よく覚えていたのは先のような何気ない？会話です。

宇田川雅子

初穂会での岸先生

ごちそうになったりしました。気前の良い先生は、いつも色々ごちそうしてくださいました。

先生のお父様が当時N響関係者でいらつしやつたため、名だたるクラシックの演奏家のコンサートに連れて行ってもらったことが何度もありました。思春期の吸収力の高い時期に、聖書はもちろんのこと、たくさん「本物」に触れさせてもらえたことは、その後の私の人生に大きな影響を与えていて、大変感謝しています。

兄の結婚式のため、トルコから一時帰国した際、成人になっていた初穂会メンバーズは岸先生のお宅にお邪魔して皆で飲み、翌日はぐでんぐでんになりましたが、楽しい思い出です。（その節は恭子さん、大変ご迷惑をおかけいたしました。）

岸先生と10代の多感な時期から現在にいたるまで、共に時間を過ごさせていただけことは神様からの大きなプレゼントです。神様、先生ご夫妻、本当にありがとうございます。先生と恭子さんのことを覚えてこれからも祈っています。

岸先生、ありがとうございます！

久保哲哉

「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる！」これは経堂北教会に赴任前の打ち合わせで、前任の片岡先生と岸先生が開口一番に語った御言葉です。その時は緊張のため、リアクションができませんでしたと記憶しています。続いて「いい人を紹介します、と言っておいたから」（僕のことまだ何も知らないでしょう…）と

鴎友学園での聖書科非常勤講師を引き受けることとなり、授業の教材となる岸先生お手製のプリント（今もカスタマイズして中1教材として使用）とソフトの「太郎」（2／7に最新版を購入）の説明（日本人なら日本企業に金を落とすべきとの教えに納得）を受けました。

赴任後には聖書研究にフィリピ（愛の言葉が多め）、主日説教ではIコリント（厳しい言葉が多め）を語る準備をしていると相談する

と、「逆の方がいい」とのアドバイス。「厳しく罰して赦す（鴎友プリント&岸先生との日常）」のがキリスト教の本質であり、主日礼拝では神の愛を主軸に置くという基本姿勢がここで固まりました。これは牧師としての大きな分岐点であつたと思います。

何より影響を受けたのが、岸先生の葬儀説教です。ギャラリで音響調整をしながら涙したことが度々ありました。このような説教で神の国へ旅立つことができる皆さんを羨ましく思いました。ここだけの話、岸先生の葬儀説教の構造を分析し、実際の葬儀に適用していました。その結果、遺族の方々にとても喜ばれました。是非、伝道のために岸先生の葬儀説教集を書籍化してほしいと願っています。

牧師として必要なことの全てを岸先生から学びました。冒頭に挙げた聖書の言葉通りの伝道師生活になりました。

岸先生、本当にありがとうございました。先生の葬儀には何とかして参列しますので、連絡をよろしく願います。主の御心がなりますように。祝福を祈ります！

感謝をもって走り続けます

角田 直

岸先生との出会いはおよそ40年前、私が小学生のときだったと思いますが、当時の記憶はほぼなく、中学入学後に同じ中学の先輩だと知ったということが最初の記憶。その後、CS生徒、CS教師、長老、会計監査などとして、とても近くでお世話になってきました。

プライベートでも、結婚式の司式や乾杯の挨拶をしていただきました。吉祥寺のフレンチ・レストランに連れて行っていたいたり、富士急ハイランドでFUII YAMAの列に並んでもらったりしたこともありました。東日本大震災の時には自宅に帰れず、牧師館に泊めてもらったことも。

数多くの思い出やエピソード、ここでは話せないような話もたくさんあります。すべてが懐かしい思い出ですが、その中でも受洗の時にいただいた聖句はずっと記憶に残っています。「なすべきこと

はただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです」（フィリピ3・13、14）

当時はまだ成人前で、これからの人生に向けた大きな指針として、背中を押すようなメッセージだと受け取りました。あれから30年、少なからず影響を受け、速度は一定せずとも、また、方向も不確かなままですが、なんとか走ってきたのではないかと思います。

しかし、今になって思うと、岸先生自身がこの言葉を体現して、走り続けているのではないかと思います。特に岸主任牧師体制に変わった当初、長老として岸先生の言葉を聞いていましたが、牧師を送り出す教会になるという方針で一貫していました。それから20年ほど過ぎましたが、その言葉通りになったのではないのでしょうか。

この経堂北教会で岸先生とともに過ごせたことに感謝しつつ、これから走り続けるであろう岸先生にならって、自分もまだまだ走り続けなければと改めて思います。

追悼

母の思い出

故・
加瀬和子姉

1月11日、母は天に召されました。95歳と10ヶ月でした。ワイン

を愛し、旅好きの母でした。母は若い時から働く女性の魁として矜持をもつて仕事に打ち込んでいま

した。また短歌を楽しみ、農大の成人学校で農業を学ぶ勉学の人でもありました。父が亡くなる頃か

らは矯風会の評議員にも微力を尽くさせていただきました。

ここ数年は足腰衰え教会に赴くこと叶わず、私が立ち寄ると自宅ではいつも聖書の話聞かせてもらいました。数日前に面会した際は体調も安定しており、病床でも

教会報や同窓会誌を渡すと、家に帰って勉強せねば、と熱意は衰えを見せませんでした。

目を細めて孫たちを愛し、但し息子たちには厳しい母でした。

長年の心不全と共存しながらも長生きを得ることができました。母は経堂北教会の50周年にあたる記念の年に受洗しました。

祖母が教会員であったことから自宅での家庭集會に会員の方々が集まれ讃美歌を歌うなど、近づき難いと感じていたそうですが、

祖母が身体不如意になつてきた頃、鬱勃として主を思うようになり、加速度的に主に近づきたいとの気持ちの高まりから信仰告白をいたしました。

それから教会は感動と安らぎの場となりました。創立70周年記念文集に母が寄せた一文を転載します。「神様に呼ばれ教会で養われ育てられていたのだと思い、いくつになつても幼子のように主の懷に飛び込んでいける、そのような心の拠り所の与えられている恵みに感謝」。

賑やかが好きだった母も両親、夫と共に天国で再会し、喜んでい

ることと思います。北教会の皆様には生前のご厚誼を感謝申し上げます。(加瀬 明)

1987年、妻と出会ったことがきっかけで経堂北教会の礼拝に出席しました。初めての聖餐式では訳もわからずパンとぶどう酒を頂いてしまいました。それほどキリスト教については白紙の状態でした。それ以降、濃淡ありましたが教会の礼拝には出席をしてきました。主日礼拝や葬儀の時に語られる説教に心を揺さぶられ、義理の父母の生き方を見、また記念文集での教会員の人たちの証を読み、生きる上で確固たるバックボーンがあることをとても羨ましく思っていました。

時が経ち、岩盤のような私の心にも少しずつ御言葉が浸みこんだよう

で、困難な時にはイエスキリストの御名によつて祈るようになりました。妻の強い勧めもあり、ここ数年は受洗のことを考えるようになりました。が、「そのうち、

受洗おめでとう！

受洗して

澤田洋一

1987年、妻と出会ったことがきっかけで経堂北教会の礼拝に出席しました。初めての聖餐式では訳もわからずパンとぶどう酒を頂いてしまいました。それほどキリスト教については白紙の状態でした。それ以降、濃淡ありましたが教会の礼拝には出席をしてきました。主日礼拝や葬儀の時に語られる説教に心を揺さぶられ、義理の父母の生き方を見、また記念文集での教会員の人たちの証を読み、生きる上で確固たるバックボーンがあることをとても羨ましく思っていました。

時が経ち、岩盤のような私の心にも少しずつ御言葉が浸みこんだよう

で、困難な時にはイエスキリストの御名によつて祈るようになりました。妻の強い勧めもあり、ここ数年は受洗のことを考えるようになりました。が、「そのうち、

そのうち」と先延ばしをしてきました。岸先生の相田みつをの引用が心に刺さりました。

洗礼を受けるなら勿論岸先生からと考えていて、もう時間が無い、今お願いしないと一生後悔すると思ひ、心の中で受洗を決心していましたが、それでも言い出せずに悶々としていました。

年末の礼拝後、偶然にも自転車置き場の前で岸先生と二人きりになる(1分くらい)時間を与えられ、神様から背中を押されるように洗礼のお願いをしました。ここまで来るのに38年も要してしまいました。どうやらそのような計画だったようです。

洗礼式では多くの教会員の方に立ち会つてお祈りをいただきありがとうございました。今はクリスマスチャンとして責任を感じています。これからも御言葉を学び、常に自分自身を確かめ、クリスチャンとしてより良く生きられるよう努力していきたいと思っています。本名は洋一ですが、今まで通り「ゴンちゃん」「ゴンさん」「ゴン」と呼んでいただけだと思います。これからもよろしく願ひいたします。

説 教

『氣長に』

ヨブ記1章20節～22節
ヤコブの手紙5章7節～11節

岸 俊彦

ヤコブが最後の勧めをします。
最初の勧め(1・3)と同じ「忍耐」です。

1世紀の終わり、「ローマの平和」のもと、陸路、海路が整えられ交易が盛んになりました。大土地所有者は麦、オリブ、ワインなどを大量に手にしました。小作たちが汗水たらして日々こつこつ働いて生み出した成果です。それらを売買した商人たちが富を手に入れました。ローマの繁栄によつて、富める者と貧しい者の間に高い壁ができました。到底、乗り越えたり破壊できるような壁ではありません。終わりの日、主がその壁を打ち砕いてくださるまで忍耐し、心を強くもつのです(8節)。

改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と忍耐と寛容とを軽んじるのですか(ローマ2・4)と語りました。「寛容」が「氣を長くする」と同じギリシヤ語です。神は、私たちが悔い改め、御言葉に聞き従うことができるように、豊かな慈愛と忍耐と寛容の神です。

ペトロも「愛する人たち」と語りかけます。「愛する人たち、この一事を忘れてはなりません。主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のようです。ある人たちは遅いと思つていますが、主は約束を遅らせているものではありません。一人も滅びないで、すべての人が悔い改めるように望み、あなたがたのために忍耐しておられるのです(Ⅱペトロ3・8、9)。

この「忍耐」が「氣を長く持つ」と同じギリシヤ語です。「主が来られる時が近づいている」と語られても、主の裁きの時、神の正義が実現する終わりの日は来ないという戸惑いや疑いにペトロが答えた言葉です。

私たちはその問いの2千年後を生きています。私たちからすれば、2千年経つても終わりの日はまだ来ていません。再び主は来てくださつていません。

主が氣長に、私たちが悔い改めることを待ち望んでいるからです。私たちは主の豊かな慈愛と忍耐と寛容のもとにあることを忘れてはなりません。

主の氣長さを示す聖句をもう一箇所あげます。「愛は忍耐強い。愛は情け深い。妬まない。愛は自慢せず、高ぶらない(Ⅰコリント13・4)」。愛の賛歌です。主の愛は、氣長に私たちを待つていてくださる愛です。主が私たちをいつも見守つていてくださいます。

この主の氣長さと、主が怒り、裁くことがまるで正反對、主は矛盾しているのではないのでしょうか。ヤコブは「御父は、御心のままに、真理の言葉によつて私たちを生んでくださいました。それは、私たちを、いわば造られたもの

の初穂とするためです(1・18)と語っています。私たちは神に似せて造られました。神は私たちの親です。私たちは、キリストを賜るほどに愛されている神の子です。子が亡びるのをよしとする親がいるのでしょうか。親である神は断固として子である私たちが亡びることを許しません。そのための神の怒りです。私たちを祝福し、私たちがどのような困難な中にあることも、忍耐強く、辛抱強くあることができるように、主が私たちに、その憐れみと慈しみを注いでくださっています。

神に似せて造られた私たちにも、本来、この氣長さが、寛容と寛大があります。キリストは、「あなたがたの父が慈しみ深いようになり、あなたがたも慈しみ深い者となりなさい(ルカ6・36)」と語ってくださいました。「十字架を忍び：罪人たちのこのような反抗を忍べられた(ヘブライ12・2、3)」。氣長な主、寛大で寛容な主です。主が、信仰によつて生きようとすると、私たちに与えてくださる恵みの賜物が、忍耐、寛容、寛大、氣長な氣持ちです。

ルデヤ会議講演会

危機の時代の宣教

―宣教師が見たウクライナ―

ミラノ賛美教会宣教師 内村伸之

神の視点で世界を見る

今なお続くロシアによるウクライナ侵攻と、戦禍における教会の【平和をつくる働き】と【欧州の教会のこれから】についてお分かちさせていただきます。

戦禍における教会の、
平和をつくる働き

2022年2月24日にロシアによるウクライナ侵攻がはじまり、その二週間後にはミラノ賛美教会から派遣され、物資と献金を携えウクライナ国内の教会支援にあたりました。

この当時、深刻な問題となっていたのは、ロシアからの攻撃が激しい北部と東部から逃げてきた人々が、戦闘の少ないウクライナ西部に集まっているということでした。この時にベレホヴェというウクライナ西部の町で牧会されているヴァレンティン牧師と初めて出会いましたが、昔から知って

る友人と再会したような不思議な印象を持ちました。

私がミラノから運んだ物資を、教会のスタッフたちと一緒にストレージに運び込む時に彼は救済物資を手にして次のように言いました。「この荷物の一つ一つに、ミラノの教会とその背後にある日本の教会の愛と祈りがあることを感じる」。彼はこのとき、教会の礼拝堂を食堂にして、戦闘地域から逃げてきた人々に1日3食、温かな食事を提供し、毎晩、礼拝堂で伝道礼拝を捧げ、福音を伝えていました。ヴァレンティン牧師は、私に、伝道礼拝でメッセージを語って欲しいと依頼をしてくださいました。「英語でメッセージをしてください。そうすれば私がウクライナ語に通訳する」。ヴァレンティン牧師は「今は終わりの時代だから、教会は福音を語る必要がある」と言うのです。そこで、私は英語でメッセージを取り次ぐことを決めました。

その時、とても不思議なことが起こったのです。礼拝開始の5分前に一人の日本人宣教師が現われたのです。彼は船越真人という宣

教師で、戦闘が激しくなったオデーサから教会メンバーたちと一緒に近くの村へ避難していました。そこで、いつものように私は思いっきり日本語でメッセージを取り次ぎ、船越宣教師が完璧なロシア語に、聖霊で一つとなって通訳をしてくださいました。このように、宣教というのは「出会いの恵み」によって進められていくことを、この時も実感しました。今もウクライナで続いていることは、報道や国際政治の視点からは「武力の戦い」ですが、戦地に置かれた教会のリーダーたちは「今、起きていることは『霊の戦い』だ」と言います。

2022年の夏には、ウクライナ西部に疎開していた船越宣教師ご夫妻や教会のメンバーたちは、再び激戦地のオデーサに戻り、今もヘルソン州やミコライウ州とあった、ロシアからの激しい攻撃が続く地に赴き、そこに置かれている教会を後方から援助しています。私たちも、その後何度も同行させていただき、オデーサの教会の人々と共に礼拝を捧げました。不思議なことですが、侵略戦

争という悲惨な現状は悪化の一途を辿っているのに、戦禍の中で捧げられる礼拝は、驚くほど神の臨在を感じます。人々は本当に真剣に御言葉を求め、涙を流していました。砲撃の危険があっても、人々が互いに愛し合うこと、そして祈り、賛美を捧げることが誰も止めることはできないということを垣間見ます。

欧州と日本の教会のこれから

2022年の秋にドイツで行われた在欧教会牧師会に、ウクライナから船越宣教師ご夫妻をお招きしました。その後、23年、24年と続けて、夏の「ヨーロッパキリスト者の集い」にも船越宣教師ご夫妻をお招きして「ウクライナの戦禍における教会の、平和をつくる働き」を報告していただいています。このことにより、在欧教会やクリスチャンの間に霊的な覚醒がおこり、皆が祈りで繋がり、宣教が進んでいます。この危機の時代、すでに世に勝利されたキリストの言葉に従い、なすべき事をする私たちとさせていただきたいと思っています。

ルデヤ会講演会報告

ミラノ賛美教会の内村伸之先生に宣教師の立場からのお話を伺った。先生は人道支援者としてロシアによるウクライナ侵略2週間後には、パンを届けにルーマニア側から現地に入り、難民の避難する教会に向かったそう。難民は何キロも歩いて国境を越えてくる子ども一人の場合もあるという。ユニセフやNPO団体はいわば支援の大動脈。ロシア正教やカトリック教会の宣教師が退避する中、プロテスタント教会は小さな援助の拠点として医療など、一人ひとりに即した毛細血管的な援助を行っている。女性を狙う反社の団体を阻止する自主検問も設置しているそう。

行政機能麻痺目的に侵略を受け破壊しつくされたキーウのベッドタウンの映像に厳しさを感した。先生は救援物資を届けたハンガリーとの国境近いベレホレで礼拝を行おうとした時、オデーサから避難して来たロシア語の堪能な船越真人宣教師と遭遇。通訳者を得た奇跡のような出会いに神様の導き

を感じたそう。以来オデーサを拠点に援助を行っている。人々は物資、水、電気、温かい食事のある教会に集まり、その際にイエス様、十字架の話を聞く。次第に物資の配給がなくても、礼拝に集まるようになったそう。人々の心は福音を求め、ウクライナへの憐れみと許しを祈り、つらい状況の中で神がどこにおられるのかと問うているという。そのため主イエスを描いた漫画『メサイヤ』と聖書が人気だという。負傷兵への訪問、復興の手がかりともなるトイレの建築も行っている。献金や物資、発電機などは、ウクライナ内部の混乱もあり、陸路手渡しで。

最大の援助は「一日も早いロシアの撤退と、困難を乗り越え、神様を必要とする人々の上に主のお支えと、聖霊の働きを祈り続けること」と語られた。攻撃の続く戦時下から復興の手助けまで、神様のお働きを信じ、福音の宣教を携えて援助に向かわれる先生方。私たちも祈り、思いを寄せていきたいと思う。先生の活動はネットでも配信されている。56名が熱心に話を伺った。

(小嶋幸子)

長老のファイル

岸先生の退任まで1か月となりました。牧師交代の準備、今年度の総括及び新年度の計画に向けて、定例長老会に加え臨時長老会を行い、協議を重ねています。

牧師館のリフォームが完成し、教会員の皆様にも内覧していただきました。リフォーム前は水回りがひどく、柱がボロボロになっており、岸先生ご一家が住んでいた頃にリフォームしていればと今更ながら悔やまれます。2月には松谷先生ご一家が引越されました。経堂での生活に少しずつ慣れていただければと思います。牧師館の次は会堂のLAN工事を行い、来年度は会堂2階の床の補修工事を進める予定です。新体制となってもスムーズに教会運営を進められるよう、課題や業務の整理をしています。長きにわたりお働きいただいた岸先生に頼っていた部分も多く、財務をはじめ各委員会でも牧師と長老の役割分担の見直しを進めています。残る時間はわずかなり焦りもありますが、皆で協力

し、祈りつつ、主の導きに従って進めてまいります。

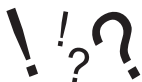
コロナ禍がおさまっても中々増えなかった礼拝出席者が少しずつ伸びてきました。2月には5年ぶりの受洗者、そして転会者が与えられ、教会全体が喜びに充ち溢れました。主の恵みと大きな励ましに心より感謝いたします。

42年間、私たちの人生の節目に立会い、御言葉を取り継いでいただいた岸先生、毎週礼拝がきちんと守られるよう整えてくださった恭子夫人のお働きには感謝してもしきれません。静かに去りたいと送別会を固辞されていましたが、3月30日礼拝後に、短い時間ですが教会員からの感謝を岸先生ご夫妻へお伝えする時を持つことになりました。つくばに移られる岸先生ご夫妻と共に讃美する時となりますので、ぜひご出席ください。

4月になれば牧師交代に伴い、教団・教区・支区への報告、就任式、登記等の名義変更など様々な手続きや行事が発生します。滞りなく進めていくことができますよう、どうぞ皆様お支えください。

(酒井由紀子)

個人消息



掲示板



- レントに入る 3月5日(水)
- 西南支区総会
3月9日(日) 午後2:00 於 美竹教会
- 西南支区音楽部研修会
3月16日(日) 午後2:00 於 霊南坂教会
「礼拝と讃美歌」荒瀬牧彦牧師
(カンバーランド長老キリスト教会田園教会)
- 受難節第3主日 3月23日(日)
説教 伊藤英志牧師 (三軒茶屋教会)
- 棕櫚の主日 4月13日(日)
- 受難週祈祷会 4月16日(水)
午前10:30 午後7:00
- もより教会受難週合同礼拝
4月17日(木) 午後7:00
- 受難日祈祷会 4月18日(金) 午前10:30
- イースター墓前礼拝 4月20日(日) 午前7:30
- イースター礼拝 4月20日(日) 午前10:15
- 教会総会 4月27日(日) 礼拝後

編集後記



▽今月は岸先生送別特大号です。今まで岸先生にお任せしていた原稿依頼等を委員でやってみて改めて先生の働きの重さを感じました。(酒井)

「栄 光」2025 年 3 月号
日本基督教団 経堂北教会
〒156-0051 東京都世田谷区宮坂 3-21-11
電話 : 03-3428-5029 / FAX : 03-3428-5038
牧 師 : 岸 俊彦
編 集 : 栄光編集委員会
Email : kyodon@nifty.com
HP : <http://kyodokita.life.coocan.jp>

牧師の書斎から



つくばの自宅を出るたびに、「忘れ物はないか、鍵は持ったか」とうるさく言われます。一度、教会とアパートの鍵を忘れて、教会員と大家さんにご迷惑をかけたことがあったからです。

言われたことを一つひとつ点検するうちに、言われなかった物を忘れます。先日はデータを入れたメモリーを忘れました。集会のために作成したデータがありませ

ん。教会にはヘブライ語を入力できるソフトがありません。早く行って教会総会資料の準備をしなればと教会に来たのに、Uターン。結局3時間の無駄。クラウドに入れておけばいつも思うのですが、無料の容量はすぐ一杯になって使い勝手が悪く、役に立ちません。自宅に戻れば、呆れられて、「70歳でやめることになって本当によかった」と言われました。「年をとるということの現実よ。私のようにメモに書き出して一つひとつチェックしないからよ」とも言

われました。「慌てて事故にならないように」との声を背に、ゆっくりと教会に戻りました。

その前の週の夜、急いで教会の玄関に車を駐車しようとして、2つある手すりの前の方を見落としてバンパーをぶつけました。バンパー交換の出費に、「年金暮らしなのだから余計な出費はしないように」と小言。

つくばでは買物は基本、車で週1回出かけます。時間帯にもよりますが、私たちのような年配の二人連れが目立ちます。欲しいもの

をカーットの籠に入れて、セルフレジに並びます。果物など「よく見て買っていない。不要な物が多すぎる。今度からは車で待っていて」と言われます。

これもコミュニケーション、頭の体操、口の体操、忍耐の練習と思っています。老後、二人で何の会話もなく、テレビを見たり、パソコンに向かっていたりでは、相互のやりとりにはなりません。

耳も遠くなり、「エッ」と聞き返すことが多くなりました。なぜか小言はよく聞こえます。(岸俊彦)